

佐倉孫三及び湯目補隆両氏の足跡について（八訂稿）¹

—領台初期の日本人関係文献—

（令和 4（2022）年 7 月 13 日（水）現在）

〔目 次〕

（補正経緯）	1
一 はじめに	3
二 佐倉孫三氏の足跡	5
三 湯目補隆氏の足跡	7
四 おわりに	9

（補正経緯）

HP 初出：・平成 22（2010）年 6 月 15 日（火）初稿作成

（某紙掲載稿（平成 22 年 5 月 16 日稿。原文：縦書）を、一、二補正の上、横書に改め、ネット関連脚注を一部に付したのもの）

HP「法制史学者著作目録選」⇒「日本統治下台湾警察史コーナー」中に所収

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

・平成 24（2012）年 8 月 23 日（木）改訂稿作成

（一部補正、追加）

・平成 25（2013）年 10 月 10 日（木）再訂稿作成

（佐倉の履歴書及び第二次台湾在勤時代の件に言及。その他、一部補正、追加）

・平成 26（2014）年 8 月 31 日（日）三訂稿作成

（西村一之氏「蕃務本著（マ、本署）調査課と「理蕃」：佐倉孫三を通して」『日本女子大学人間社会学部紀要』第 24 号（平成 26 年 3 月刊）の件に言及。その他、一部補正、追加）

・平成 29（2017）年 9 月 5 日（火）四訂稿作成

（石川實氏の御示教を受け「湯目補隆」部分を一部補正、追加）

・平成 29（2017）年 11 月 27 日（月）五訂稿作成

（石川實氏の新論考を受け「湯目補隆」関係部分を一部補正、追加）

・令和 2（2020）年 4 月 18 日（土）六訂稿作成

¹ 詳しくは、本 HP 別稿「佐倉孫三氏関係資料一斑」：

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sakura001.pdf>〉、

「湯目補隆氏関係資料一斑」：

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/yunome001.pdf>〉、

「明治中葉警官練習所訳官久松定弘等及び筆記者井土経重（霊山）検討一斑」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/yakkan.pdf>〉各参照。

(沈佳冊博士の御示教を受け「佐倉孫三」関係部分を一部補正、追加)

- ・令和4(2022)年4月1日(金)七訂稿作成

(レイアウトを全面変更の上、一部補正し、『CD版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選(第十五輯)—』(令和4(2022)年4月1日刊)に収録した。)

- ・令和4(2022)年7月13日(水)八訂稿作成

(文字ポイントを他の諸稿分に合わせるとともに、一部補正した。)

一 はじめに

現在、『台湾協会報』第六五九号（平成二十一年八月刊）以降で、片倉佳史氏（1969～）が「台湾に残る日本統治時代の建造物を訪ねる」（十二回連載予定）との表題の下、貴重な写真とともに、感銘深い紀行文を掲載されている。同氏は、早くより日本統治下台湾の歴史遺産を探訪され、既に、大きな反響を呼んだ『台湾 日本統治時代の歴史遺産を歩く』（戎光祥出版、平成十六年八月刊）²や『台湾に生きている「日本」』（祥伝社新書、平成二十一年三月刊）³等を出されているが、平成十八（二〇〇六）年六月の台湾協会講演会ではこれらについて講演されている（『台湾協会報』第六二二号〈平成十八年七月刊〉参照）。また、旧臘、先年台湾でヒットした映画『海角七号 君想う、国境の南』（二〇〇八年八月公開）⁴が、日本でも上映された。所謂難しい問題は、ここではさておき、いずれも、多くの同協会会員の方々には、往時のことを思い出さされる興味深いものであると思われる。

私事で恐縮であるが、昭和四十七（一九七二）年春、台北市小南門外の広州街二十号（都市整理により、今では南寧路四十六号という由。）、戦前の番地でいうと台北市八甲町一丁目二十一番地に行く機会があった。その時、さる学校の図書館で、偶然武内貞義氏の名著『台湾』（台湾日日新報社、大正四年四月初版刊。新高堂書店、昭和二年十一月改訂版刊。台湾刊行会、昭和四年増訂版刊。台北・南天書局、一九九六年八月影印本刊）を見てからは、昔の日本時代のことが無性に知りたくなり、時間があれば、日本人と関係あった市内各所を探索することが趣味になった。こうしたことで、片倉氏の御高著等は、その頃のことを回想させ、更に新たな有意義な知識を得させてくれるもので、ただただ感謝するばかりである。同協会会員の方々も、同じお気持ちかと思う。

とある日、南菜園跡⁵を探しに旧児玉町あたりを散策していたところ、その近くの大きな榕樹並木の通り一面に何か露店らしきものが立ち並び、人が蝟集する珍しい光景に出くわして、吃驚した。これが、当時有名な牯嶺街の古書攤街⁶であった。古書の街といえば神保町のそれしか知らなかったもので、その異様な景色には関心をそそられた。このあたりは、映画『牯嶺街少年殺人事件』（一九九一年公開）⁷で、一九六〇年代頃の雰囲気がかめるが、当時は日本時代の住居、官舎群もまだ多く残っていて、日本人の眼から見ると、なかなか面白いところであった。

² 〈<http://my.so-net.net.tw/katakura/shinkan.html>〉 参照。

³

〈<http://www.amazon.co.jp/%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E3%81%AB%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%81%A6%E3%81%84%E3%82%8B%E3%80%8C%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%80%8D-%E7%A5%A5%E4%BC%9D%E7%A4%BE%E6%96%B0%E6%9B%B8149-%E7%89%87%E5%80%89-%E4%BD%B3%E5%8F%B2/dp/4396111495>〉 参照。

⁴

〈http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%B7%E8%A7%92%E4%B8%83%E5%8F%B7_%E5%90%9B%E6%83%B3%E3%81%86%E3%80%81%E5%9B%BD%E5%A2%83%E3%81%AE%E5%8D%97〉 参照。

⁵ 〈http://blog.goo.ne.jp/jinija_taiwan/e/ee6a3f57aee1377d233c6c3de3142b8f〉 参照。

⁶

〈http://jp.tranews.com/Show/Style201/Column/c1_Column.asp?SItemId=0131030&ProgramNo=A000201000009&SubjectNo=8386〉 参照。

⁷ 映画『牯嶺街少年殺人事件』：

〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%BC%E5%B6%BA%E8%A1%97%E5%B0%91%E5%B9%B4%E6%AE%BA%E4%BA%BA%E4%BA%8B%E4%BB%B6>〉

それまでは、当時の書籍には、ほとんど関心がなかったが、そこで、初めて、戦前刊行の多くの台湾関係書に出会った。鷺巣敦哉氏（一八九六～一九四二）のことを知ったのも、と或る店で『台湾警察四十年史話』（自己出版、昭和十三年四月刊）を見かけ、その序文で、同氏が『台湾総督府警察沿革誌』の編纂に従事している旨のことを読んだことによる⁸。また、露天形式の店が中心の牯嶺街では稀な本建築のある古書店で、米国人が金に糸目をつけずに上記『沿革誌』を探していることを聞いたこともあった。往時の日本書籍は、当時から一部は古亭書屋等から復刻されてはいたが、まだまだ少数であり、牯嶺街での当該書籍漁りの人は、外国人も含めて極めて多かった。ただ、その後、日本時代の書籍の目ぼしいものは、成文出版社や南天書局からほとんど復刻された結果、現在は、古書という意味はあっても、本そのものは、さほど珍しいものではなくなっている。なお、これら古書攤は、行政事情とかで、その後ほどなく牯嶺街から光華商場に移転した由であるが、これについては、台北の古書店の歴史も含め、李志銘氏『半世紀旧書回味 一九四五―二〇〇五 從牯嶺街到光華商場』（群学出版有限公司、二〇〇五年四月刊）⁹に詳しい。

この時購入したものの中に、『台湾大観』（日本合同通信社、昭和七年十二月二十五日刊。台北・成文出版社、一九八五年三月影印本刊）がある。同書には、その時点での回想録が多数収められているが、これより十数年たつと日本統治も終結するという時代的観点から見ると、内容はなかなか興味深いものであった。多くの著名人も書いていたが、個人的には、二つの回想記、すなわち、領台直後の警察業務に従事していた佐倉孫三氏（一八六一～一九四一）「三十七年前の夢」及び台湾総督府警察官及司獄官練習所の初代所長であった湯目補隆氏（ゆのめすけたか、一八五八～一九三六¹⁰）「追憶三題」に強く引かれ、いつか両氏のパーソナルヒストリーを調べてみたいと思った。

しかるに、その後、日台両国の専門研究者による日本統治下台湾史研究が飛躍的に進捗し、多くの史料集、研究書等が刊行された結果、最近では素人とか好事家が何かできる余地はほとんどなくなってきていることから、個人的にも台湾物から明治物に関心を変えたこともあって、佐倉、湯目両氏のことは、何もできぬまま、荏苒今日に至った。

こうした中、先般、たまたま明治警察史関係の書籍を繙いていたところ、両氏の内地での事績に出くわした。となると、両氏は、日本統治下台湾警察史及び明治警察史の両者にまたがる人物ともいえるので、思い立って、急ぎ、少しく調べてみた。このような日本統治初期の先人の活動の跡を探ることに、いかほどの意味があるのかはわからないが、取りあえず、以下では、佐倉、湯目両氏の足跡、関係文献だけでも、一、二紹介しておくこととする。

⁸ 〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/washisu001.pdf>〉 参照。

⁹ 〈<http://mypaper.pchome.com.tw/zen/post/1246834643>〉、

〈<http://www.toho-shoten.co.jp/toho-web/search/detail?id=196005&bookType=ch>〉 参照。

¹⁰ 湯目補隆の没年については後述（「三 湯目補隆氏の足跡」）。（平成 29 年 9 月 5 日追加）

二 佐倉孫三氏の足跡¹¹

佐倉孫三（雅号：達山）氏は、福島・二本松出身の著名な漢学者、中国問題評論家であるが、文久元（一八六一）年三月十八日に生まれ、昭和十六（一九四一）年二月十五日に逝去している。同氏については、例えば、平島郡三郎氏（一八六八～一九四二）『二本松寺院物語』（二本松町公民館、昭和二十九年三月刊）、『福島県史』第二二巻（福島県、昭和四十七年二月刊）（各論編八 人物）、『二本松市史』第九巻（二本松市、平成元年五月刊）（第三編 人物）及び『二松学舎六十年史要』（二松学舎、昭和十二年十二月刊）等二松学舎関係書で、おおよそのことがわかる。

兄に、大審院検事、弁護士であった佐倉強哉氏（帯刀、一八五〇～一九三九）がいる。同氏は、小説家榊山潤氏（一九〇〇～一九八〇）¹²の岳父に当たるが、榊山氏の『歴史』（昭和十三年発表。戊辰戦争時の二本松落城を扱った長編歴史小説）の主人公片倉新一郎は、佐倉強哉氏がモデルである。佐倉孫三氏自身にも、『霞城乃太刀風』（昭和三年九月刊。復刻版：『霞城乃太刀風 二本松老少年隊の勇戦』（二本松市・本田書店、昭和六十三年七月刊））¹³なる著作がある。

佐倉孫三氏は、兄強哉氏の助力を受けて、明治十（一八七七）年十二月十六歳で上京し、同十一年四月二松学舎に入塾、研鑽を積む。陸士に入校せんとするも、事情あって断念し、二十五歳で千葉県の警察官となり（佐倉家の遠祖は千葉県佐倉との由）、佐倉警察署次席警部まで進む。同氏『警士之亀鑑』（知新堂、明治二四年一二月刊）は、当時の有名な殉職事案（同県巡查鈴木清助氏）¹⁴関係著作である。その後、警視庁、司法省を経て、東京府に勤務する。

明治二十八（一八九五）年四月下関条約締結後、文官第一陣として渡台する。その経緯は、前掲『台湾大観』中の同氏「三十七年前の夢」に詳しい。台湾では、同書所収の大東学人「旧雨会の人とその思ひ出」が、「漢学者で腕も立つ佐倉孫三君 二松学舎出の漢学者である君は、腕も立つ、即ち文武両道に秀てゐた。所で督府は先ず腕の方を買って警察官たらしめた。」（九七頁）というように、専ら警察業務に従事して、活躍した。明治二十九（一八九六）年一月一日発生芝山巖事件（学務部員六名遭難）では、事件発生後、台湾総督府民政局内務部警保課にいた佐倉氏はその後事を処理している（『史談会速記録』第三八二号〈昭和五年二月刊〉二〇～二七頁に、氏の回想記あり。）。最後は、南部の鳳山県警視（明治三十一年二月頃鳳山県打狗警察署長）、台南県弁務署長等を歴任し、妻の逝去という不幸もあってか、在台三年にして、明治三十二（一八九九）年春頃帰国している。

¹¹ 詳細はなお不詳であるが、現在の台湾では、佐倉が第二次台湾在勤に当たり台湾総督府に提出した履歴書の写しが何らかの方法で閲覧できるようである。これはかなり詳細ものであり、佐倉のそれまでの生涯が把握できるもので貴重な資料と仄聞する（平成 25 年 8 月 23 日 R 氏より教示を受く。）。よって、本稿の記載はこれに基づき再検討の要があるが、今すぐにはどうしようもできないので、取り敢えずはこのままにしておくをお断りしておく。（平成 25 年 10 月 10 日追加）⇒後掲（註 14）参照（平成 26 年 8 月 31 日追加）

¹² 〈<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A6%8A%E5%B1%B1%E6%BD%A4>〉参照。

¹³ 〈<http://snowmoon.org/top.htm>〉、〈http://snowmoon.org/ho_kasumi.htm〉参照。

¹⁴ 〈http://www.geocities.jp/chiba_bunka/suzuki.html〉、〈<http://johokan.net/history/tradition/meotozaka.html>〉参照。

その後は、同年三月に静岡県警部（静岡警察署長、浜松警察署長）、更に、山梨県北都留郡長を経て、明治三四（一九〇一）年十二月休職となるが、明治三十六（一九〇三）年には、有名な『台風雑記』（漢文本、東京・国光社、明治三六年八月刊）を刊行している。更に、明治三十七（一九〇四）年夏には、福建省（閩）福州武備学堂の招聘に応じて、福州に赴き、六年滞在する。この間、福建省警務学堂等で教えているが、同地で、『閩風雑記』（漢文本、福州・美華書局、光緒三十（一九〇四、明治三十七）年刊）なる福建地方の風俗書を出している。

明治四十二（一九〇九、宣統元）年三月頃福州を離任するが、この後、何故か再び台湾にて理蕃業務に従事し、三年程を過ごしているようである。ただし、この時期の行動については、明治四十三（一九一〇、庚戌）年時点での在台は確認できるものの、残念ながら、詳細は不明である。今後の課題であるといえる¹⁵。

帰京後は、小石川大塚（東京市小石川区大塚窪町二四番地）に住み、爾後、二松学舎を中心に活躍し、晩年に及んでいる。

佐倉孫三氏の著作は、『達山文稿』（漢文本、達山会、昭和十二年四月刊）、『談藪』（漢文本、達山会、昭和十三年九月刊）等数多いが、今では大正期までのものは、国立国会図書館近代デジタルライブラリーで殆ど読める。このうち、台湾関係で最も重要な著作は、前掲『台風雑記』である。同書は、領台後日本人が書いた最初の台湾の風俗書として著名であり、戦後の台湾でも、幾度か翻刻されている。最近では、林美容氏（中央研究院民族学研究所）が、精力的に研究を進められ、邦文のものでは、「宗主国の人間による植民地の風俗記録—佐倉孫三著『台風雑記』の検討—（〈特集〉台湾における日本認識）」『アジア・アフリカ言語文化研究』（Journal of Asian and African Studies）第七一号（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、平成一八年三月刊）があり、更に、『台風雑記』の中国語訳本である『白話図説 台風雑記 台日風俗一百年』（台湾書房出版、二〇〇七（平成十九）年十一月刊）をも刊行されている。これについては、幸いなことに、昨平成二十一（二〇〇九）年末、その日本語訳本である三尾裕子氏監修・台湾の自然と文化研究会編訳『台風雑記 百年前の台湾風俗』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化

¹⁵ 平成 25（2013）年 8 月 25 日（日）午後東京で、林美容氏及び西村一之氏を中心とするワークショップ「佐倉孫三の台湾原住民に関する著述とその業績に関する研究」が開催され、両氏及び会員諸氏による佐倉の第二次台湾在勤時代の報告等がなされた。これにより、当該時代の佐倉の状況については、かなり判明した（例えば台湾総督府警務局『理蕃誌稿 第三編』（大正 10 年 3 月 30 日刊）184~5 頁 ⇒佐倉編纂になる『治蕃紀功初集』の件（「近代デジタルライブラリー」112 齣）参照。）。これらは、いずれ別途公表されるものと思料され、今後注視しておく必要がある。なお、中央研究院台湾史研究所 HP にある『台湾総督府文官職員録』のページは以下である。両氏の御示教に感謝の意を表するものである。

〈<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>〉（平成 25 年 8 月 30 日追加）

その後翌平成 26 年春に西村一之「蕃務本著（ママ、本署）調査課と「理蕃」：佐倉孫三を通して」『日本女子大学人間社会学部紀要』第 24 号（平成 26 年 3 月刊）17~32 頁が公表され、当該時期の佐倉孫三氏研究について大きな進展を見た。本稿は、これに基づき再検討すべきものではあるが、今はその余裕がない。取り敢えずこの旨記載しておくにとどめる。

〈https://jwu.repo.nii.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_snippet&page_id=13&block_id=50&index_id=308&pn=1&count=20&order=7&lang=japanese〉（平成 26 年 8 月 31 日追加）

研究所、平成二十一年十二月刊)¹⁶が出版されたことから、現代の日本人にも容易に理解できるようになった。

林美容氏は、続けて、前掲『閩風雜記』との比較検討をも進められ、「跨文化民俗書写的角色變化：佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」（二〇〇九（平成二十一）年十月二十二日台湾・中興大学人文社会科学研究センター主催の成果発表会での報告を活字化したもの。掲載誌不詳。）等を出しておられると仄聞する¹⁷。

佐倉孫三氏の台湾史研究に占める比重は大きなものがあるが、これらにより、同氏のこの方面の件については、近年かなりのことが判明したといえる。次には、同氏の本格的な伝記著作の出現が待たれるところである。

三 湯目補隆氏の足跡

湯目補隆氏（ゆのめ すけたか、一八五八～一九三六¹⁸）は、明治中葉東京に在った警官練習所に於けるヘーン警察大尉（一八三九～一八九二）の独逸語訳官（ヘーン大尉の講義録として、『警察講義録』（博聞社、明治十九年二月版権届、六月再版。復刻本：日本立法資料全集 別巻四四七、信山社出版、平成十九年六月刊）がある。）として、明治警察史上著名な人物であるが、日本統治下台湾警察史上でも、台湾総督府警察官及司獄官練習所（以下「台湾警官練習所」ともいう。）の初代所長として、記憶されるべき人物である。

湯目氏の台湾での業績の一端は、同氏「徳山高く水長し」『児玉藤園將軍』（児玉源太郎大将十三回忌記念出版物。拓殖新報社、大正七年八月刊）後輯八八～九二頁や上記「追憶三題」『台湾大観』（日本合同通信社、昭和七年十二月刊）一六九～一七五頁等に記述されており、同氏と台湾、就中当時の児玉源太郎台湾総督（一八五二～一九〇六）との親密な関係がわかる。また、湯目氏と時の後藤新平民政局長（後に民政長官。一八五七～一九二九）との接点は、鶴見祐輔（一八八五～一九七三）編『後藤新平』（全四巻、後藤新平伯伝記編纂会、昭和十二～十三年刊。各種復刻本あり。最近のものでは、『〈決定版〉正伝

¹⁶ <http://buoneverita.blog89.fc2.com/blog-entry-6.html> 参照。

¹⁷ これについては、その後、林美容「跨文化民俗書写的角色變化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」『漢学研究』第28巻第4期（総号第63号）（漢学研究中心、民国99（2010、平成22）年12月刊）261~294頁として公表された。（平成25年10月10日追加）

⇒その後聞くところによると、現在台湾で佐倉氏『閩風雜記』（漢文本、福州美華書局、光緒30（1904、明治37）年刊）の註釈作業が始まっているとのことである。早き公刊が期待される。（平成26年8月31日追加） ⇒沈佳姍博士の御示教によれば、その後、民国107（2018）年1月に、佐倉孫三原著、林美容編著、沈佳姍註釋『新編 閩風雜記 百年前・一位日本人的福建風俗見聞』（台北・五南図書出版、2018年1月刊）が刊行された。同書には巻頭に林美容「編者序」及び同上記「跨文化民俗書写的角色變化—佐倉孫三《閩風雜記》与《台風雜記》的比較」を収録している。沈佳姍博士の御厚情に感謝いたします。（令和2年4月18日追加）

¹⁸ （追記）湯目補隆の没年は長く不明であり、本稿では旧二高資料等から従来「1858~?（昭和10年代初め頃か?）」としてきたが、平成29（2017）年7月に石川實氏の御教示で昭和11（1936）年と判明した。（平成29年9月5日追加）

後藤新平』〈一海知義・校訂、藤原書店、平成十六～十八年刊〉がある。)で判明する。

こうしたことから、湯目氏の生涯については、興味深いものがあることは、早くより推測されていた。その履歴、業績については、例えば、高橋雄豺博士(一八八九～一九七九)『明治警察史研究』第一卷(明治年代の警察幹部教養)(令文社、昭和三十五年三月刊)にも一部見られたが、その警官練習所以前のことについては、湯目氏本人の検討だけからは、よくわからなかった。しかるに、上記警官練習所の他の独逸語訳官を調べる中で、上村直己教授に「警官練習所の訳官たち」『日本古書通信』第六七七号(昭和六〇年十二月号)、同『明治期ドイツ語学者の研究』(多賀出版、平成十三年三月刊)¹⁹等があつて、これらに関し言及されておられることが判明し、その後、幸いにも、同教授から親しく御教示を頂戴できた。

それらによれば、湯目補隆氏は、安政五(一八五八)年四月十五日仙台に生まれ、東京府籍(元は仙台市)、明治初めに上京し、司馬遼太郎(一九二三～一九九六)の小説『胡蝶の夢』の主人公で有名な司馬凌海(島倉伊之助、1840～1879)の私塾である春風社において初めてドイツ語を学び、その後、東京外国語学校(所謂旧外語)、警視医学校²⁰(貸費生徒)、東京大学医学部(予科)等で、独逸語、法医学を修得し、明治十年代終り頃、東京の警官練習所でヘーン警察大尉の訳官をするに至ることがわかる。その後は、同二十年代初め、内務属から第三高等中学校教諭となり、更に、独逸語に遊学。帰国後、陸軍幼年学校嘱託、第二高等学校独逸語講師嘱託を経て、宮城県尋常中学校長になる。この間、明治二十七(一八九四)年三月頃には、所謂「後相馬事件」で、後藤新平に関係している。明治三十(一八九七)年、領有後の台湾に渡り、台湾総督府警察官及司獄官練習所の初代所長を勤める。しかるに、ある事件があつて、明治三十六(一九〇三)年三月休職となる。帰国後は、明治四十三(一九一〇)年に秋田県立秋田中学校長になるが、大正元年十月同辞職後のことや没年、墓所等は判然とせず、なお今後の課題である²¹。

次に、湯目氏の台湾時代について多少敷衍しておくとして、例えば、以下の文献がある。すなわち、『台湾総督府警察官及司獄官練習所沿革史』(台湾総督府警察官及司獄官練習所、明治四十二年三月刊)十六～二十三頁、『旧植民地人事総覧 台湾編一』(日本図書センター、平成九年二月刊。当該年度の『職員録』〈内閣官報局〉から抽出したもの。)、『鷺巣敦哉著作集 I』(鷺巣敦哉:一八九六～一九四二。緑蔭書房、平成十二年十二月刊。親本:『警

19

〈<http://www.amazon.co.jp/%E6%98%8E%E6%B2%BB%E6%9C%9F%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E8%AA%9E%E5%AD%A6%E8%80%85%E3%81%AE%E7%A0%94%E7%A9%B6-%E4%B8%8A%E6%9D%91-%E7%9B%B4%E5%B7%B1/dp/4811561317>〉参照。

²⁰ 本HP別稿「裁判医学校乃至警視医学校関係文献一斑 一明治警察史の一齣一」参照。

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/saiban001.pdf>〉(平成25年10月10日追加)

²¹ (追記)平成29(2017)年7月に入り、石川實氏の御高論及び御教示により、湯目補隆の逝去年月日が昭和11(1936)年10月31日であること、また、湯目の妻は久松定弘(1857～1913)令妹であることを知り得た。石川實氏に感謝申し上げます。(平成29年9月5日追加)
⇒その後、石川實氏「久松定弘と湯目補隆の研究回顧」『大警視だより』続刊第5号(通巻第34号、大警視川路利良研鑽会、平成30(2018)年1月1日刊)4～5頁が出た。湯目補隆親族について貴重な記述がある。(平成29年11月27日追加)⇒同稿は、警察政策学会資料第110号『近代警察史の諸問題—川路大警視研究を中心に—』(警察政策学会、令和2(2020)年5月8日刊。〈<http://www.asss.jp/>〉にアップ済。)165～167頁に再録。(令和4(2022)年7月13日追加)

察生活の打明け物語』〈自己出版、昭和九年二月刊〉。「はしがき」の次に掲載の「ゆはれ深き練習所門柱の由来記」（台湾警官練習所門柱の文字を書きし人は、湯目氏の父湯目隆善氏とのこと、当時八七歳。正門：明治三十二年九月竣工）、『鷺巣敦哉著作集Ⅱ』（緑蔭書房、平成十二年十二月刊。親本：『台湾警察四十年史話』〈自己出版、昭和十三年四月刊〉）一〇二頁等である。また、明治三十五（一九〇二）年二月に、湯目氏が中心となって、台北で創刊された『警察監獄学雑誌』（台北・小南清話会、明治三十六年一月まで計十二号が刊行か。）²²は、台湾警官練習所と関係深い雑誌であり、もとより湯目氏の諸動静の記載もあって、更なる検討が期待される²³。

四 おわりに

以上、領台初期日本人の活動紹介の手始めとして、佐倉孫三及び湯目補隆両氏の生涯、業績につき一瞥した。日本統治下台湾史検討の中で、こうした在台日本人研究は、早くより、極めて興味深いものがあることが指摘され、近年は、多くの論者により、数多の著作が出されている。個人的には、台湾に在勤した個々の警察関係者について、その検討が、日本統治下台湾警察史とか同台湾史という大きな流れの中で一体いかなる意味があるかについては、別のこととしても、今後、機会をとらえて、更に取り上げてみたいと考えている。今次成稿に当たっては、上村直己教授とともに、台湾・中央警察大学教授梁添盛博士²⁴より御懇篤な御示教を賜った。両先生に深厚の謝意を表するものである。

（平成二十二年五月十六月初稿）

²² HP「日本の古本屋」：

「<http://www.kosho.or.jp/public/book/detail.do?tourokubi=86D834466F034522E743CEE99488CBB28B32CCC029D8AA7A&seq=1287&sc=4C127111151996524ED18997687098EA>」参照。

²³ 本 HP 別稿「明治 35（1902）年台北刊行の『警察監獄学雑誌』検討一斑—湯目補隆検討補遺—」（<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatvoshi/kangokugaku.pdf>）（平成 25 年 10 月 10 日追加）

²⁴ 梁添盛博士は 2017（平成 29）年 8 月 1 日中央警察大学警政管理学院院長に就任された。遥かに祝意を表する次第である。（<http://ja.cpu.edu.tw/bin/home.php>）（平成 29 年 9 月 5 日追加）